

孢子画 2021

木下 裕美

孢子画は、基本的にキノコの孢子をインクにして描いたものですが、キノコの色だけを使ってみたりと、必ずしも孢子ではない場合もあります。

だったら、『キノコ画』にすればいいのではないかと思われるでしょう。でもそうすると、キノコの絵を上手に描ける人と思われてしまいそうなので『孢子画』というネーミングにしました。絵を描くことはそんなに上手ではないのです。

きっかけは、どんぐりからのキノコ栽培に失敗してヒトヨタケが出来てしまったことです。まず、ヒトヨタケ1本の孢子の量に驚きました。またヒトヨタケの傘が溶けた時、墨汁のようになることを知りました。

その後、ササクレヒトヨタケを見つけて絵を描きました。それが孢子画第一号で、2013年のことです。

次にツチグリの孢子もインクにしました。水には全く溶けないが油には溶ける、そんな孢子を滑らかなインクにするまでには月日がかかりました。出来上がったインクは焦げ茶色で長年経ってもササクレヒトヨタケ同様、変色もありません。当時はその2色でモノクロでしたが、お気に入りでした。

コロナ禍の最中、6月の雨上がりにひときわ鮮やかなヒヨタケを見つけました。これは使える！と閃きオレンジに近い赤のインクを作ってみました。これを契機に孢子画は渋いモノクロからメルヘンなカラーに変わり、2021年度はアミガサタケの孢子を使って黄色のインクを作ることに成功しました。



ヒトヨタケインク&ツチグリンク



れおん昔ばなしシリーズ『カチカチ山』

その1年前にアミガサタケを茹でると黄色の孢子が採れることに気が付いてはいたのですが、うっかり食べてしまい、あとでインクに出来ることに気が付きました。



アミガサタケの胞子流



胞子流撮影直後の様子



上澄も煮詰めてインクにします

作り方はアミガサタケの茹で汁を放置して、沈殿した胞子だけをインクにします。粉末のアラビアゴムとカビストッパーを混ぜます。



出来たてのインクと数週間後

水分を飛ばすためにインクを放置していたら、なにやら謎の結晶が形成されていました。



アミガサタケをアミガサタケで

アミガサタケインクでアミガサタケを描いたので、本年度の目標は達成しました。となると、次は青緑色のインクを考えてみようと思いました。そんな時、ロクショウグサレキンモドキを友人に送っていただきました。



ロクショウグサレキンモドキ

これで緑のインクが出来る！と期待したものの、今度は水にも油にも、しかも期待のアルコールにも溶けません。結局青系のインクを作ることは次への新たな課題となりました。

2022年の抱負はインクのカラーのコンプリートを目指します！